

Title	自己目的化尺度の作成とその検証：自尊心、自己愛、友人からの印象との関連から
Author(s)	金政, 祐司
Citation	対人社会心理学研究. 2012, 12, p. 41-49
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/5622">https://doi.org/10.18910/5622</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 自己目的化尺度の作成とその検証<sup>1)</sup>

—自尊心、自己愛、友人からの印象との関連から—

金政祐司(追手門学院大学心理学部)

本研究は、自己への過度な固執、拘泥により引き起こされると考えられる自己目的化と自尊心、自己愛ならびに友人からの印象との関連について検討を行った。研究1の回答者は大学生347名であった。研究1では自己目的化の3側面、「自己希薄化」、「自己高揚化」、「自己利益希求化」を測定するための尺度、自己目的化尺度の作成を行った。加えて、自己目的化と自尊心ならびに自己愛との関連を検討した結果、「自己希薄化」ならびに「自己利益希求化」は、自尊心と負の関連を、また、自己目的化の3側面はすべて自己愛傾向の不適切な側面であるとされる「注目・賞賛欲求」と正の相関関係を示していた。研究2の回答者は106組の親密な友人ペアであった。研究2では、自己目的化尺度の因子構造の再現性が確認された。さらに、本人の自己目的化と友人からの印象との関連について検討した結果、「自己希薄化」と「社交性」、「自信」との間に、また、「自己高揚化」と「社交性」、「人柄の良さ」、「責任・真面目さ」との間に負の関連性が見られた。これらの結果について自己目的化の社会的適応性という観点から議論を行った。

キーワード: 自己目的化、自尊心、自己愛、友人からの印象、ペアデータ

## 問題

現代のように未来への不透明さや不確実性が増しさまざまな場面でのリスクの制御、統制が不可能になった社会、且つあらゆる事柄が個人の選択の対象となり、その帰結に関する責任やリスクを個人が背負わなければならないという個人化が浸透した社会においては、自己が目的化していくことが指摘されている(例えば、Bauman, 2001 澤井他訳 2008; Beck, Giddens, & Lash, 1994 松尾他訳 1997; 鈴木, 2005)。社会に包摂される大多数の人々が共有していた価値観やイデオロギーが瓦解し、個人に対する社会規範や社会の強制力が弱体化したことで、すなわち、大きな物語と呼ばれるものが崩壊したことで、個人は社会の抑圧から解放され、自己に関する選択決定を自らが行うという自由を獲得した。しかしながら、社会規範や社会的なルールが希薄になり、それらの拘束力が失われれば、社会における個々人の価値観は分断され相対化されていく。社会に一貫すると考えられてきた価値観やイデオロギーが喪失し不在化すれば、個人の判断の参照基準は不明瞭になり、何が妥当で、何が確からしいものなのかについての確信は弱まっていく。それゆえ、“自我でさえも、もはや自明な自分ではなくなり、自己を語る矛盾だらけの言説へと断片化(Beck et al., 1994 松尾他訳 1997, p.21)”することになる。

このように社会や共同体からの抑制や圧力はともなうものの個人に安心感を与えてくれる選択肢は掻き消され、価値観が多様化することで、あらゆる事象は個人にとって選択の対象となっていく。あるいは、あらゆる個人に纏わる事象が個人の選択の結果であるとみなされるようになる。個人にとってあらゆる事柄が選択対象と化した場合(何かを“選択する”も選択、“選択しない”も選択となることも含め)<sup>2)</sup>、それは選択する主体である自己もまた選択の対象とな

り得ることを意味する。私たちには、自身が“どのように生き、どのように振る舞うのかを自分で決める以外ほかに選択の余地がない(Beck et al., 1994 松尾他訳 1997, p.141)”のである。すなわち、“私らしさ”というものが社会階層や社会的基盤を超え、自らの選択や嗜好によって規定されるため、私はどういう人間であり(ありたいと思い)、何を求めている(求めたいと思っている)のかについて常にモニターリングをしながら、そのつど、“私らしさ”を捉え直さなければならなくなるのである。

選択する主体である自己が選択の対象と化せば、その主体性は脆弱になり、価値観の相対性の渦の中で、自らの選択決定に対する信念は薄れていくであろう。それゆえ、個人は自らに過度に注視、拘泥し、私とはどういう人間なのか、私は何を欲し何を求めているのか、また、私は自分自身について何をどのように選択決定すればいいのかといった事柄を再帰的に自己に問いかけていくことになる。すなわち、自己が目的化することになるのである。

このような自己に関する自己への問いかけは、上記のように選択の主体である自己が選択される自分に対してまなざしを向けているため選択の主体が不在化し、自己決定を欠いたままに際限なくループ化される蓋然性は高くなる。さらに、多様な価値観を内包し、不透明感を増す社会の中で自らが選択を行ったことの結果や帰結に対する責任やリスクを背負わなければならないとなれば、自身に関する重大な決定はできる限り遅延されていくことにつながりやすい。潜在的なリスクは私たちに取るべきではない選択肢を示唆はするものの、取るべき選択肢については何も示してはくれない(Beck et al., 1994 松尾他訳 1997)のである。昨今人口に膾炙した「自分探し」や「個性の追求」といった言葉もそれらが端的に示されたものとして捉えることができるだろう。

ただし、「私とはどういう人間なのか」、「私は何を求め、何がしたいのか」、「私には何ができ、どのような能力があるのか」といった問いは、根本的にはアポリアであり、社会の関係性や役割から離れて、個人が自身のみで内的に規定し得るものではないはずである。それは、これまでの自我同一性やアイデンティティに関する研究で、青年期のアイデンティティ形成における社会や他者との関係性の重要性が指摘されていること(例えば、宮下・渡辺, 1992; 杉村, 1998; 谷, 1997)からも伺い知れるだろう。また、我々は自らの未来を見通すことのできない存在であるがゆえ、自身にとって何が最善の手となるのか、あるいは自分は何をすればうまくいくのかについて、“現段階”で時間を先取りし絶対的、確信的な答えを得ることなどできない。それゆえ、相対化された価値観のもと参照基準が不明瞭な状態で、自身の手中に多種多様な選択肢があると思えば、必然的に自己に注視し、自己に拘る程度は増していき、自己目的化の傾向は強まっていく。その過程において、先のような自己言及的な問いを反芻的に思考することに固着すれば、自己の主体性はさらに弱まり、社会的に不適応な状態に陥ってしまう可能性は増大するであろう。

それでは、このような自己目的化あるいは再帰的な自己には具体的にどういった側面が想定され得るであろうか。これまで述べてきたように、判断の参照基準が不明瞭、且つ自己決定に関する責任は自らが背わなければならないとなれば、個人は、決断することを躊躇うか、自身の責任の回避をはかるか、失敗を恐れ即時的に利益や快楽を獲得できる選択肢を取ろうとする傾向が強まるであろう(例えば、Bauman(2001 澤井他訳 2008)は、“長期にわたる安心感が得られない状況では、「即席の満足」が道理にかなった方策として魅力的にみえてくる(p.214)”と述べている)。すなわち、そのような状況においては、主体性が脆弱化することで決断を際限なく遅延させていく、自分の決断の責任を他者に帰属させる、もしくは、自身の決断や投資に対して即座に利益や快楽が得られると予見される短絡的な選択を行う、といったプロセスが優勢になると仮定される。それゆえ、自己目的化には、以下の3つのネガティブな側面が想定され得るであろう。

1 つ目は、自己高揚化という側面である。先のように外的な参照基準なしに自己に対して過度に焦点化すれば、それは社会的な比較を経ずに、無条件の自己肯定へとつながりやすい。それゆえ、現在の自身への評価を不当に感じる、また、その評価の不当性の原因を自らにではなく他者へと帰属させていく傾向は増すと考えられる(例えば、速水, 2006; 諏訪, 2005; 内田, 2007)。さらに、それは同時に、過度な社会的承認の希求を引き起こすものであろう。これは自分自身を現実よりも過大に評価し、その評価を他者にも認めてもらいたいと望むことから、自己

目的化における自己高揚的な側面として捉えられよう。

2 つ目の側面は、自己希薄化である。自己が目的と化せば、先述のように主体性は揺らぎ、自身の決定、決断に対する確信の度合いは薄れていく。このような主体の脆弱性は、自己への過度な注視を促進させるがゆえに、自己を希薄化・不在化させてしまう可能性がある。つまり、自己を自身のうちに追い求めれば追い求めるほど、自分自身を捉えることができなくなり、自分はどういう人間なのかについて困惑し迷走してしまうのである(例えば、土井, 2004; 三浦, 2005; 長山, 2003; 鈴木, 2005)。それゆえ、自己が目的化すれば、自分が誰からも必要とされていないといった感覚や他者は自分のことを理解してくれていないのではないかという焦燥感を募らせる自己希薄化が起こり得ると考えられるのである。

3 つ目の側面は、自己利益希求化である。上記の自己高揚化の場合と同様、自己が目的化すれば自己への過度な焦点化が起こり、自身の利得に対して敏感になる傾向は強まる。それゆえ、できるだけ小さい投資によってできる限り大きな利益を獲得しようとし、自身のインプットとそこから得られるアウトプットの差分を不合理に最大化することにとらわれると考えられる(例えば、長山, 2003; 諏訪, 2005; 内田, 2007; 山田, 2007)。この自己利益希求化は、自分のやりたいことしかしたくない、報われるかどうか不明確な努力は回避したいといった特徴を有する自己目的化の一側面として把握できるものであろう。

本研究では、これまでの議論を踏まえ、自己目的化の3側面を測定するための尺度の作成を行うとともに、自己目的化と社会的適応との関連について検討を行う。まず、研究1では、自己目的化の3側面を測定するための質問項目を収集し、それらについて調査を実施することで自己目的化尺度の作成を行う。また、自己に関する他の尺度、ここでは自尊心と自己愛傾向を取り上げ、それらと自己目的化尺度との関連性をみることで、自己目的化の併存的妥当性について検討を行うとともに、それら社会的適応性と自己目的化との関連についても検討する。

次に、研究2では研究1で作成した自己目的化尺度の因子構造の再現性について確認する。さらに、自己目的化が本人の評価した適応性のみならず、他者からの評価という対人関係における適応性とも関連するのかが、について友人関係のペア調査を実施して、その検討を行う。

## 研究1

研究1では、問題部分での議論を踏まえ、自己目的化の3側面を測定する自己目的化尺度の作成を行う。また、作成された自己目的化尺度の性差を検討するとともに、自尊心と自己愛傾向との関連についても検討する。

これまでの議論を踏まえれば、自己目的化の3側面は、

社会的な不適応を招くと想定されることから、仮説 1. 自己目的化の 3 側面は、自尊心と負の関連を示すであろう、仮説 2. 自己目的化の 3 側面は、自己愛傾向の不適応な側面として考えられる「注目・賞賛欲求」(小塩, 2004, 2007)と正の関連を示すであろうという 2 つの仮説を設定し、その検討を行う。

## 方法

**回答者と実施方法** 近畿圏の 4 つの大学で心理学関係の講義を受講している学生を対象に調査を実施した。その結果、男性 164 名、女性 183 名、合計 347 名(平均年齢 19.64 歳;  $SD = 1.45$ )の有効回答を得た。なお、調査実施の際、データは統計的処理されるため調査協力者の匿名性は保たれることが説明された。調査時間は 20 分から 30 分であった。

**調査内容** 質問項目は以下のとおりであった。なお、回答者の年齢や性別といったデモグラフィックな特徴を問う項目は質問紙の表紙に配置した。

1. 暫定版・自己目的化尺度—問題部分での議論を踏まえ、自己目的化に関連する議論を行っている、あるいは先に触れた自己目的化の概念に関連する記述が見受けられる書籍などから自己目的化の 3 側面を測定するのに適した表現を収集した。それらを参考にして、筆者と他の大学教員 1 名と話し合いを行い、自己目的化の 3 側面を測定するための質問項目として 55 項目を作成した。それらの質問項目を暫定版自己目的化尺度とし、回答者には、それぞれの文章が自身の考えや気持ちにどの程度あてはまるかについて、“まったくあてはまらない = 1”から“よくあてはまる = 5”の 5 件法の評定を行うよう求めた。
2. 自尊心尺度(山本・松井・山成, 1982)—自尊心尺度の 10 項目について、回答者はそれぞれの文章が自分自身にどの程度あてはまるかを、“まったくあてはまらない = 1”から“よくあてはまる = 5”の 5 件法で評定を行った。
3. 自己愛人格目録短縮版(小塩, 1999)—回答者の自己愛傾向を測定する尺度として、自己愛人格目録短縮版を用いた。自己愛人格目録短縮版は、「注目・賞賛欲求」、「優越感・有能感」、「自己主張性」の 3 つの因子からなる 30 項目の尺度である。回答者は各質問項目が自分自身にどの程度あてはまるかを、“まったくあてはまらない = 1”から“よくあてはまる = 5”の 5 件法で評定を行った。

上記のもの以外の尺度についても測定も行ったが、ここではそれらについては報告しない。

## 結果および考察

**自己目的化尺度の因子分析と他の尺度の基礎的分析** 自己目的化に関する 55 項目の評定値に対して、因子分析(SMC、主因子法)を行った。問題において想定した自己目的化の 3 側面を表すと考えられる因子を抽出するとともに、それらの因子への負荷の低い項目(.35 未満)や

複数の因子へ負荷の高い項目などを考慮して、尺度項目を選択しながら、繰り返し因子分析を行った。その結果、26 項目が残存し、想定した因子数ならびに固有値の減衰状況(5.31, 2.42, 1.32, 0.79, 0.48)から 3 因子を抽出したのちプロマックス回転を行った(Table 1)。

第 1 因子は、“私は誰からも必要とされていないのではないかと思うことがある”、“自分が今にも消えてしまいそうになることがある”といった項目に高い負荷がみられ、自己目的化での自己希薄化を表す因子であると考えられたため「自己希薄化」因子と命名した。第 2 因子は、“私が何かうまくいかないのは、周りの人たちが私の能力を見くびっているせいだと思う”、“他の人たちはもっと私のことを評価すべきだと思う”といった項目に高い負荷がみられており、自己目的化における過大な自己評価としての自己高揚化の側面と対応する因子であると考えられることから本研究では「自己高揚化」因子と命名した。また、第 3 因子は、“私は自分のやりたいことしかやりたくない”、“報われるかどうかわからない努力はしたくない”といった項目に高い負荷がみられたことから、本研究での自己目的化における自己利益希求化を示す因子であると判断し、「自己利益希求化」因子と命名した。

なお、各因子における Cronbach の  $\alpha$  係数は、「自己希薄化」因子が .83、「自己高揚化」因子が .80、「自己利益希求化」因子が .74 であった。信頼性係数が比較的高い値を示していたことから、各因子に高く負荷している項目(負荷量.35 以上)の評定尺度値の平均を各因子の得点として用いることとした。3 つの因子の平均得点および標準偏差は、「自己希薄化」因子が  $M = 3.11$ ,  $SD = 0.74$ 、「自己高揚化」因子が  $M = 2.30$ ,  $SD = 0.65$ 、「自己利益希求化」因子が  $M = 3.01$ ,  $SD = 0.65$  であった。

また、自尊心ならびに自己愛傾向の 3 因子の  $\alpha$  係数は、.82~.89 と十分に高い値を示していたことから、自尊心は 10 項目の評定尺度値の平均、自己愛傾向は各因子に対応する項目の評定尺度値の平均によってそれら次元の得点の算出を行った。「自尊心」平均得点ならびに標準偏差は、 $M = 2.89$ ,  $SD = 0.72$ 、自己愛傾向の 3 因子のそれらは、「注目・賞賛欲求」で  $M = 3.11$ ,  $SD = 0.82$ 、「優越感・有能感」で  $M = 2.62$ ,  $SD = 0.72$ 、「自己主張性」で  $M = 3.06$ ,  $SD = 0.70$  であった。

**自己目的化尺度の性差** 上述の因子分析で得られた自己目的化尺度の 3 因子について性差の検討を行った。その結果(Table 2)、「自己高揚化」、「自己利益希求化」において性差がみられ、女性よりも男性の方がそれらの得点が高かった。すなわち、男性の方が女性よりも、自分自身を過大評価し、現在の自身への評価を不当に感じやすい、もしくは自己の利得に対して敏感になる傾向があるといえる。

Table 1 自己目的化尺度の因子分析結果

	因子名	希薄化	高揚化	希求化	共通性
Q36	私は誰からも必要とされていないのではないかと思うことがある	.75	.09	-.02	.656
Q39	自分が今にも消えてしまいそうになることがある	.70	-.02	-.11	.445
Q45	私は時々自分が透明な存在なのではないかと不安になる	.66	.19	-.17	.473
Q53	私は自分が本当は何をやりたいのかわからなくなることがある	.64	-.33	.09	.424
Q09	誰も自分のことなど気にかけてくれないのではないかと思うことがある	.61	.08	.02	.564
Q44	時々、今の私は本当の私ではないと感じることがある	.60	.09	-.07	.386
Q02	周りの人は、本当の私のことをわかってくれないと思う	.50	.29	.03	.461
Q12	私は私自身が本当は何をしたいのかをよく考えてしまう	.44	-.27	.10	.277
Q52	私は自分が他者と交換可能な人間ではないかと思うことがある	.43	.07	.07	.275
Q17	私は人前では本当の自分を出せないと思う	.41	-.11	.10	.279
Q37	私が何かうまくいかないのは、周りの人たちが私の能力を見くびっているせいだと思う	-.03	.74	.06	.516
Q54	他の人たちはもっと私のことを評価すべきだと思う	.00	.70	-.01	.468
Q07	私はもっと社会から認められても良い存在だと思う	-.20	.59	-.07	.328
Q03	私は自分の能力に見合うだけの評価を周りから受けていない	.08	.58	.03	.402
Q32	私の才能を理解できる人はほんの一握りの人たちだと思う	.11	.57	-.03	.396
Q40	一生懸命努力をするというのは、能力のない人がすることだと思う	-.04	.53	.18	.478
Q51	一生懸命に何かに打ち込んでいる人を見るとさめた気分になる	.10	.39	.16	.366
Q04	私は自分のやりたいことしかやりたくない	-.04	-.03	.57	.267
Q29	報われるかどうかかわからない努力はしたくない	.08	.09	.56	.380
Q16	自分のやりたくないことはやらなくてもいいと思う	.03	.12	.52	.348
Q15	少しの努力で最大限の利益を獲得したい	-.08	-.04	.50	.256
Q41	何事もすぐに結果が出ないとイライラする	.23	-.01	.47	.340
Q18	自分に責任がふりかかってくるようなことはできるだけ避けたい	.12	-.08	.44	.254
Q55	自分の目標や目的に直接関係しないことに取り組むのは意味がないと思う	.04	.31	.36	.328
Q42	自分をまげてまで何かをやる必要はないと思う	-.08	.10	.35	.219
Q49	自分は何事も適当にやっていたらばうまくいく人間だと思う	-.11	.18	.35	.203
		因子間相関関係			
自己高揚化		.29			
自己利得希求化		.30	.38		

自己目的化と自尊心ならびに自己愛傾向との関連次に自己目的化の3側面の得点と自尊心ならびに自己愛傾向の3因子との関連をみるため、それら変数間に相関分析を行った。なお、その際、上記のように自己目的化の2側面に性差が認められたことから性別を統制した偏相関分析を行った。その結果 (Table 3)、「自己希薄

化」は自尊心と比較的強い負の相関がみられ ( $r = -.59, p < .001$ )、また、「自己利益希求化」についても自尊心と低いながらも負の相関がみられた ( $r = -.14, p < .05$ )。

これらのことから、自己目的化の「自己希薄化」と「自己利益希求化」の側面については、仮説1が支持され、その不適応性が示唆されたといえる。

また、自己目的化の3側面、「自己希薄化」、「自己高

Table 2 研究1における自己目的化の3側面の男女別の平均値

自己目的化の3側面	男性 (N = 160)	女性 (N = 178)	t 値
自己希薄化	3.07 (0.77)	3.14 (0.71)	0.86
自己高揚化	2.47 (0.71)	2.13 (0.54)	4.85 ***
自己利益希求化	3.09 (0.66)	2.93 (0.64)	2.16 *

\* $p < .05$ ; \*\*\* $p < .001$

Table 3 自己目的化の3側面と自尊心ならびに自己愛傾向との偏相関関係

自己目的化尺度	自己愛傾向			
	自尊心	注目・賞賛欲求	優越感・有能感	自己主張性
自己希薄化	-.59 ***	.14 *	-.32 ***	-.32 ***
自己高揚化	.08	.38 ***	.36 ***	.13 *
自己利益希求化	-.14 *	.20 ***	.01	.07

注) N = 324. 性別を統制した。\* $p < .05$ ; \*\*\* $p < .001$

揚化」、「自己利益希求化」はすべて自己愛傾向の「注目・賞賛欲求」と正の相関関係を示していた( $r = .14, p < .05$ ;  $r = .38, p < .001$ ;  $r = .20, p < .001$ )。「注目・賞賛欲求」は、自己愛傾向の不適切な側面として捉えられること(小塩, 2004, 2007)から、これらの結果は、自己目的化の3側面の不適応さを示すとともに、仮説2を支持するものであるといえる。加えて、「自己希薄化」は、「優越感・有能感」ならびに「自己主張性」と負の相関関係を( $r = -.32, p < .001$ ;  $r = -.32, p < .001$ )、「自己高揚化」は、「優越感・有能感」、「自己主張性」と正の相関関係を示していた( $r = .36, p < .001$ ;  $r = .13, p < .05$ )。

上記の結果から、研究1において作成した自己目的化尺度は、自尊心と自己愛傾向といった自己に関するほかの尺度との関連性をもっており、その併存的妥当性が示されたといえる。加えて、仮説1の一部、仮説2が支持されたことから、自己目的化傾向は社会的な不適応につながることを示唆された。

## 研究2

研究2では、研究1で作成された26項目の自己目的化尺度の因子構造の再現性を確認するとともに、自己目的化が本人の認知だけにとどまらず、他者からの評価においても不適応さを示すかの検討を行うため、友人関係のペア調査を行うこととした。ここでは、他者からの評価として友人からの印象(友人関係における他者からの認知)を取り上げ、自己目的化との関連について検討を行う。自己目的化傾向が他者からの評価においても不適応さを示すのであれば、自己目的化の3側面は親密な友人からの印象と負の関連を示すことが予想される。

### 方法

**回答者と実施方法** 近畿圏の5つの大学で心理学関係の講義を受講している学生を対象にして調査の依頼を行った。調査依頼では、本調査が青年期の友人関係を対象としたものであり、本人と親しい友人とペアで調査に参加してもらう必要があることが告げられた。また、データは統計的処理されるため調査協力者の匿名性は保たれることが併せて説明された。

講義を受講している者のうち本調査の主旨を理解して協力する意思があるようであれば、質問紙などが入ったB4封筒を各自手元に確保してもらった。B4封筒の中には、本人用の質問紙と友人用の質問紙、友人への質問紙の依頼状(本調査の主旨の説明と協力へのお願いが書かれたもの)、質問紙を回収する際に使用する密封用の長形3号封筒シール付2通、調査協力への謝礼が2セット(本人用と友人用)入っていた。なお、本人用の質問紙と友人用の質問紙については、混乱を避けるため前者の表紙を緑色、後者の表紙を黄色と色分けを行った。

調査に協力する意思を示した者には手元のB4の封筒に上記のものが入っているかどうかを確認してもらい、それらを持ち帰って、自分の最も親しい友人に本調査の説明とともに友人用の質問紙、質問紙の依頼状ならびに密封用の封筒1通を渡してもらうよう依頼した。また、友人が調査に協力する意思があった場合は、調査協力の依頼と併せて調査協力への謝礼を手渡し、本人も同様に質問紙と密封用の封筒1通、調査協力への謝礼を確保してもらうように告げた。

質問紙実施時の注意として、本人と友人とが独立して質問紙に回答してもらうこと、また、質問紙への回答を終えたのち、それぞれが自らの手で質問紙を密封用の封筒に入れシールで密封することを教示した。なお、質問紙の回収は、調査の依頼をした教員が、調査協力者本人から本人用と友人用の質問紙が密封された封筒2通を受け取るという形で行われた。

その結果、108組の有効回答を得たが、回収時に封筒が密封されていなかったものや明らかに質問内容を理解して回答していないと判断されるものについては除外し、106組の友人のペア(男性ペア32組、女性ペア74組; 平均年齢20.33歳;  $SD = 1.43$ )、212名を分析の対象とした<sup>3)</sup>。なお、相手の友人と知り合ってから期間の平均は、42.88ヶ月( $SD = 47.04$ )であった。

**調査内容** 質問項目は以下のとおりであった。なお、年齢や性別といった回答者のデモグラフィックな特徴を問う項目は質問紙の最後に配置した。

1. 自己目的化尺度—研究1の因子分析において選定された26項目について、先の研究と同様に、回答者は、それぞれの文章が自身の考えや気持ちにどの程度あてはまるかについて、“まったくあてはまらない = 1”から“よくあてはまる = 5”の5件法の評定を行った。
2. 関係における他者認知尺度(Kanemasa, Taniguchi, Ishimori, & Daibo, 2004)—Kanemasa et al. (2004)では、最も親密な異性との関係における相手の印象評価を尋ねるために用いられていたが、本研究では親密な友人関係におけるペアの相手の印象評価について測定するために使用した。関係における他者認知尺度は、「社交性」、「魅力性」、「人柄の良さ」、「責任・真面目さ」、「自信」の5因子、24項目からなる(「自信」のみ4項目、その他は5項目)。回答者には、相手の友人の印象について、各項目に“かなりあてはまる = 1”、“どちらでもない = 4”、“かなりあてはまる = 7”(両側に対となる形容詞を配置)のSD法の7件法により評定を求めた。なお、関係における他者認知尺度はペアの友人が回答したものをその得点として用いた。

上記のもの以外の尺度についても測定も行ったが、ここではそれらについては報告しない。

## 結果と考察

**自己目的化尺度の因子分析とほかの尺度の基礎的分析** 研究1で作成された自己目的化尺度の26項目の評定値に対して、因子分析(SMC、主因子法)を行った。研究1で得られた3因子構造ならびに固有値の減衰状況(5.13, 2.65, 1.30, 0.88, 0.48)を踏まえ、3因子を指定したのちプロマックス回転を行った(Table 4)。その結果、研究1とほぼ同様の因子構造が再現され(研究1では第2因子であった「自己高揚化」が第3因子、第3因子であった「自己利益希求化」が第2因子として抽出されている)、自己目的化尺度の因子構造の信頼性が確認された<sup>4)</sup>。

また、各因子におけるCronbachの $\alpha$ 係数についても「自己希薄化」因子が.86、「自己高揚化」因子が.71、「自己利益希求化」因子が.75と研究1とほぼ同程度の数値を示していた。

このことから、研究1と同様の手順で各因子の得点を算出した結果、3つの因子の平均得点および標準偏差

は、「自己希薄化」因子が  $M = 3.15, SD = 0.82$ 、「自己高揚化」因子が  $M = 2.18, SD = 0.58$ 、「自己利益希求化」因子が  $M = 2.91, SD = 0.67$  であった。

また、関係における他者認知尺度についても因子分析(SMC、主因子法)を行った結果、先行研究(Kanemasa et al., 2004)とほぼ同様の因子構造が確認され、また、各下位尺度の信頼性係数も「社交性」で.83、「魅力性」で.83、「人柄の良さ」で.78、「責任・真面目さ」で.75、「自信」で.77と比較的高かったことから、先行研究と同様の方法で各下位尺度の得点の算出を行った。関係における他者認知尺度の各下位尺度の平均得点および標準偏差は、「社交性」が  $M = 5.50, SD = 1.07$ 、「魅力性」が  $M = 5.35, SD = 1.00$ 、「人柄の良さ」が  $M = 5.44, SD = 1.00$ 、「責任・真面目さ」が  $M = 5.15, SD = .96$ 、「自信」が  $M = 5.16, SD = 1.09$  であった。

**研究2における自己目的化尺度の性差** 研究1では「自己高揚化」ならびに「自己利益希求化」で男性の方が女性よりもそれらの得点が高いという結果が得られてい

Table 4 研究2における自己目的化尺度の因子分析結果

	因子名	希薄化	希求化	高揚化	共通性
私は誰からも必要とされていないのではないかと思うことがある		<b>.79</b>	-.04	-.05	.658
私は時々自分が透明な存在なのではないかと不安になる		<b>.76</b>	-.04	-.03	.545
自分が今にも消えてしまいそうになることがある		<b>.75</b>	-.02	-.06	.548
誰も自分のことなど気にかけてくれないのではないかと思うことがある		<b>.75</b>	-.05	.08	.633
周りの人は、本当の私のことをわかってくれないと思う		<b>.59</b>	.12	.21	.526
私は自分が本当は何をやりたいのかわからなくなることがある		<b>.52</b>	-.03	-.07	.374
時々、今の私は本当の私ではないと感ずることがある		<b>.51</b>	.00	.20	.374
私は自分が他者と交換可能な人間ではないかと思うことがある		<b>.48</b>	.06	-.01	.343
私は人前では本当の自分を出せないと思う		<b>.47</b>	.08	.01	.372
私は私自身が本当は何をしたいのかをよく考えてしまう		<b>.47</b>	-.12	.01	.335
私は自分のやりたいことしかやりたくない		-.05	<b>.63</b>	-.02	.357
少しの努力で最大限の利益を獲得したい		-.19	<b>.62</b>	-.12	.316
報われるかどうかわからない努力はしたくない		.10	<b>.56</b>	-.02	.359
自分の目標や目的に直接関係しないことに取り組むのは意味がないと思う		.08	<b>.56</b>	.04	.395
自分に責任がふりかかってくるようなことはできるだけ避けたい		.19	<b>.48</b>	-.14	.350
自分のやりたくないことはやらなくてもいいと思う		-.05	<b>.48</b>	.11	.348
自分をまげてまで何かをやる必要はないと思う		-.10	<b>.42</b>	.11	.331
何事もすぐに結果が出ないとイライラする		.15	<b>.36</b>	.15	.299
自分は何事も適当にやればいいくらい人間だと思う		-.25	<b>.35</b>	.13	.243
他の人たちはもっと私のことを評価すべきだと思う		-.08	.07	<b>.78</b>	.546
私はもっと社会から認められても良い存在だと思う		-.20	-.12	<b>.76</b>	.432
私の才能を理解できる人はほんの一握りの人たちだと思う		.21	.00	<b>.47</b>	.385
私が何かうまくいかないのは、周りの人たちが私の能力を見くびっているせいだと思う		.14	.14	<b>.41</b>	.369
私は自分の能力に見合うだけの評価を周りから受けていない		.21	.04	<b>.39</b>	.318
一生懸命に何かに打ち込んでいる人を見るとさめた気分になる		.19	.10	.20	.246
一生懸命努力をするというのは、能力のない人がすることだと思う		.15	.40	.10	.411
		因子間相関関係			
注) 研究1における因子のまとまりを優先として表記した。	自己高揚化	.24			
	自己利得希求化	.17	.36		



たことから、研究 2 においても同様の性差が認められるかについての検討を行った。その結果(Table 5)、有意確率は異なるものの研究2においても研究1と同様、「自己高揚化」ならびに「自己利益希求化」において性差がみられ、女性よりも男性の得点が高かった。

Table 5 研究 2 における自己目的化の 3 側面の

自己目的化 の3側面	男女別の平均値		t 値
	男性 (N = 64)	女性 (N = 148)	
自己希薄化	3.00 (0.79)	3.21 (0.83)	1.72
自己高揚化	2.31 (0.62)	2.12 (0.55)	2.20 *
自己利益希求化	3.14 (0.65)	2.81 (0.65)	3.37 ***

\* $p < .05$ ; \*\*\* $p < .001$

**自己目的化と友人からの印象評価との関連** 次に、自己目的化と友人からの印象評価との関連について検討を行うため、本人が回答した自己目的化尺度と友人が回答した関係における他者認知尺度との間に性別を統制した偏相関分析を行った。その結果(Table 6)、全体的にそれほど強い関連はみられてはいないものの、「自己希薄化」と「社交性」および「自信」との間には有意な負の相関関係( $r = -.18, p < .01$ ;  $r = -.14, p < .05$ )が、また、「自己高揚化」と「社交性」、「人柄の良さ」ならびに「責任・真面目さ」との間にも有意な負の関連( $r = -.20, p < .01$ ;  $r = -.17, p < .05$ ;  $r = -.14, p < .05$ )がみられた。つまり、自己希薄化が強まると、親密な友人から社交性が低い、もしくは自信がないと評価されやすくなり、また、自己高揚化傾向が高まると、友人から社交性や人柄、責任感についての評価が低くなること示された。

このことから、上記の関連については仮説が支持され、自己希薄化や自己高揚化は、本人の認知だけにとどまらず、親密な友人からの印象評価においても一定の不

Table 6 自己目的化の 3 側面と  
親密な友人からの印象評価との偏相関関係

自己目的化尺度	関係における他者認知尺度				
	社交性	魅力性	人柄の 良さ	責任・ 真面目さ	自信
自己希薄化	-.18 **	-.01	-.02	.05	-.14 *
自己高揚化	-.20 **	.01	-.17 *	-.14 *	.04
自己利益希求化	-.06	.05	-.05	-.13	.03

注)  $N = 208$ . 性別を統制した。 \* $p < .05$ ; \*\* $p < .01$

適応性を示す結果が得られたといえる。ただし、自己希薄化や自己高揚化と友人からの印象評価との関連は有意ではあるがそれほど強いものではなく、自己目的化と他者からの評価との関連については今後さらに検討の必要性があるといえる。

## 総合的考察

本研究は、自己目的化のネガティブな 3 側面、「自己希薄化」、「自己高揚化」、「自己利益希求化」を測定するための自己目的化尺度の作成を行い、自己目的化と自尊心、自己愛ならびに友人からの印象との関連について検討することで自己目的化あるいは再帰的自己の社会的な適応性を問うことを目的として行われた。まず、自己目的化尺度に関しては、2 度の調査から、その因子構造の再現性が確認され、また、各因子の  $\alpha$  係数も比較的高いことからそれらの内的一貫性が示された。さらに、自己目的化尺度の下位尺度の性差については、研究 1 と研究 2 でともに、「自己高揚化」ならびに「自己利益希求化」の得点が女性よりも男性の方が高いという一貫した結果が得られており、男性は女性よりも、自己に拘泥することで自分自身を過大に評価しやすく、自己の利得に固執しやすい傾向があるといえよう。

研究 1 において自己目的化の各下位尺度と自尊心や自己愛といった自己に関する尺度との関連について検討した結果、自己目的化の 3 側面は概念的に整合する形で自尊心や自己愛との関連を示しており、その併存的妥当性が示されたといえる。まず、「自己希薄化」は自尊心や自己愛傾向の「優越感・有能感」ならびに「自己主張性」と有意な負の相関関係を、「注目・賞賛欲求」とは有意な正の相関関係を示していた。これらの結果は、自己の脆弱性から派生する自信のなさ、さらに、それを補完するために他者から注目や賞賛を得たいという欲求の表れとして捉えることができるだろう。「自己高揚化」については、自尊心との関連はみられなかったものの、自己愛の 3 側面とはすべて有意な正の関連を示していた。これらの結果は、自己高揚化が自己を受容していることによる自信よりも、自己への過大な関心や注視との関連が強いことを示すものであろう。また、「自己利益希求化」は自尊心と有意な負の相関を、「注目・賞賛欲求」とは有意な正の相関を示しており、この結果には自分に自信はないものの他者から注目や賞賛を集めたいという二律背反性がみとれる。これらの結果は、自己目的化の 3 側面が、それぞれ異なった形で個人の社会的な不適応を招く可能性を示唆しているといえるだろう。

研究 2 の結果からは、自己目的化が上記のように本人の認知的側面だけにとどまらず、他者からの印象とも関連することが示された。自己希薄化は、親密な友人によ



る社交性の低さや自信のなさといった印象と関連しており、自己希薄化という自己の脆弱性が他者からもみとれることが伺える。また、自己高揚化は、友人からの社交性や人柄、責任感についての低評価につながるが示されており、この点も上記と同様、自己高揚化が自己への過大な関心や注視といった心象をとまなうものであることを示唆している。

今回の研究結果から、自己への過度な固執、拘泥により引き起こされると考えられる自己目的化の3側面、自己希薄化、自己高揚化、自己利益希求化が社会的な不適応と関連することが示された。今後は精神的健康や主観的幸福感といった、より直接的な適応指標と自己目的化との関連について検討する必要があるだろう。また、今回の研究では、自己目的化と親密な友人からの印象との間にある程度の関連はみられたものの、その関連性はそれほど強いものではなかった。このことから、今後、自己目的化と対人関係における適応性との関連について別の指標を用いてさらに検討を重ねていく必要があるだろう。

## 引用文献

- Bauman, Z. (2001). *The Individualized Society*. Cambridge: Polity.  
(パウマン Z. 澤井 敦・菅野博史・鈴木智之(訳) (2008). 個人化社会 青弓社)
- Beck, U., Giddens, A. & Lash, S. (1994). *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*. Cambridge: Polity Press.  
(ベック U., ギデンス A., & ラッシュ S. 松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三(訳) (1997). 再帰的近代化—近現代における政治、伝統、美的原理 而立書房)
- 土井隆義 (2004). 「個性」を煽られる子どもたち—親密圏の変容を考える 岩波ブックレット
- 速水敏彦 (2006). 他人を見下す若者たち 談社現代新書.
- Kanemasa, Y., Taniguchi, J., Ishimori, M., & Daibo, I. (2004). Love styles and romantic love experiences in Japan. *Social Behavior and Personality*, **32**, 265-281.
- 三浦 展 (2005). 下流社会—新たな階層集団の出現 光文社新書
- 宮下一博・渡辺朝子 (1992). 青年期における自我同一性と友人関係 千葉大学教育学部研究紀要, **40**, 107-111.
- 長山靖生 (2003). 若者はなぜ「決められない」か ちくま新書
- 小塩真司 (1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, **8**, 1-11.
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- 小塩真司 (2007). 自己愛傾向と自己イメージ・友人によるイメージ間の差異との関連 中部大学人文学部研究論集, **18**, 19-33.
- 杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成: 関係性の観点からの捉え直し 発達心理学研究, **9**, 45-55.
- 諏訪哲二 (2005). オレ様化する子どもたち 中央新書ラクレ
- 鈴木謙介 (2005). カーニヴァル化する社会 講談社現代新書
- 谷 冬彦 (1997). 青年期における自我同一性と対人恐怖的心性 教育心理学研究, **45**, 254-262.
- 内田 樹 (2007). 下流志向—学ばない子どもたち働かない若者たち— 講談社
- 山田昌弘 (2007). 希望格差社会 ちくま文庫
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.

## 註

- 1) 本研究の一部は、平成 23-25 年度学術研究助成基金助成金(基盤研究(C)課題番号 23530838)の補助を受けて行われた。また、調査の実施にあたり、三浦麻子先生(関西学院大学)、小林知博先生(神戸女学院大学)、谷口淳一先生(帝塚山大学)、木村昌紀氏(神戸学院大学)のご協力を頂いた。ここに深く感謝の意を表します。
- 2) 先のように、個人に関するあらゆる事柄がその個人の選択の結果であるとみなされれば、選択をせずにその決定を遅延させていること自体もまた個人の選択の結果として受け止められることになる。つまり、選択決定をしないという選択を個人自らが選んでいるとみなされるのである。例えば、私は何を求め何がしたいのかという問いに捉われれば、必然的に就職や結婚に関する決定を保留し、遅延させざるを得ない。その決定の遅延は本人が率先して選び取ったものではないが、周囲からはその選択の遅延は本人が下した選択決定であり、その帰結の責任は本人自らが背うべきものであるという判断がなされてしまうであろう。
- 3) 204 部の封筒が持ち帰られ、そのうちの 108 部が回収されたことから回収率は 52.94%となる。
- 4) “一生懸命努力をするというのは、能力のない人がすることだと思う”という項目が、「自己利益希求化」に多少高く負荷している点と“一生懸命に何か( )に打ち込んでいる人を見るとさめた気分になる”という項目の「自己高揚化」因子への負荷量が多少低い点を除く。

## **Reflexive fixation on self and social adjustment:**

From the viewpoints of self-esteem, narcissism, and impressions from a close friend.

Yuji KANEMASA(*Department of Psychology, Otemon Gakuin University*)

In this study, two researches were conducted to develop a scale measuring reflexive fixation on self and to reveal how reflexive fixation on self was related to self-esteem, narcissism, and impressions from a close friend. The concept of reflexive fixation on self was assumed to be composed of three factors—“diminished-self”, “enhanced-self”, and “desire for self-interest”. In Study 1, participants were 347 undergraduate students and the scale measuring assumed three factors of reflexive fixation on self (Reflective Fixation on Self Scale) was developed. The result showed that “diminished-self” and “desire for self-interest” were significantly negatively correlated to self-esteem and all three factors of reflexive fixation on self were significantly positively correlated to “a need for attention and praise” which was regarded as a maladaptive aspect of narcissism. In Study 2, participants were 106 pairs of same-sex close friends. The reproducibility of the factor structure of Reflective Fixation on Self Scale was confirmed. In addition, “diminished-self” and “enhanced-self” were significantly negatively correlated to several aspects of the impressions from a close friend. Those results were discussed in terms of social adjustment of reflexive fixation on self.

Keywords: reflexive fixation on self, self-esteem, narcissism, impressions from a close friend, pair data.